

妖術

泉鏡花作

一

むら／＼と四邊を包んだ、鼠色の雲の中へ、すつきり浮出したやうに、薄化粧の艶な姿で、電車の中から、颯と稍子戸を抜けて、運轉手臺に顯はれた、若い女の扮装と持物で、大略其の日の天氣模様が見られる。

日中は梅の香も女の袖も、ほんのりと暖かく、襟巻では些と逆上せるくらゐだけけれど、晩に成ると、柳の風に、黒髪がひや／＼と身に染む頃。最些と經つと、花曇り、と云ふ空合ながら、まだ何うやら冬の餘波がありさうで、唯恚う薄暗い中は然もないが、處を定めず、時々墨流しのやうに亂れかゝつて、雲に雲が累なると、ちら／＼白いものでも交りさうな氣勢がする。……兩三日。

今朝は麗かに晴れて、此の分なら上野の彼岸櫻も、

うつかり咲きさうなと云ふ、午頃から、急に吹出して、随分風立つたのが未だに止まぬ。午後の四時頃。

今しがた一時、大路が霞に包まれたやうに成つて、洋傘はびしょ／＼する・・・番傘には雫もしないで、俾の母衣は照々と艶を持つほど、颯と一雨掛つた後で。

大空の何處か、吻と呼吸を吐く状に吹散らして、雲切れがした様子は、其のまゝ晴上りさうに見えるが、淡く濡れた日脚の根が定まらず、ふは／＼氣紛れに暗く成るから・・・又直きに降つて來さうにも思はれる。

すつかり雨支度で居るのもあるし、雪駄でばた／＼と通るのもある。傘を擴げて大きく肩にかけたのが、伊達に行届いた姿見よがしに、大薩摩で押して行くと、すばめて、軽く手に提げたのは、しよんぼり濡れたも嬉しいものを、と小唄で澄まして來る。皆足どりの、忙しさうに見えないのが、水を打つた花道で、何となく春らしい。

電車の一寸停まつたのは、日本晴通三丁目の赤い柱で。

今言つた其の逞轉手臺へ、鮮麗に出た女は、南部の表つき、薄形の駒下駄に、ちらりとかゝつた雪の足袋、紅羽二重の褸捌き、柳の腰が風に靡く、と一段軽く踏んで下りようとした。

コオトは着ないで、手に、紺蛇日傘の細々と艶のあるを軽く持つ。

丁ど、其處に立つて、電車を待合はせて居たのが、舟崎と云ふ私の知己——其から聞いたのをこゝに記す。——

舟崎は名を一帆と云つて、其の邊の一保険會社の一寸いゝ顔で勤めて居るのが、表出は社用につき一軒廻つて歸る分。其の實は昨夜の酒を持越しのため、四時びけの處を待兼ねて、些と早めに出た處、聊か懷中に心得あり。

一旦家へ歸つてから出直してもよし、直ぐに出掛
けても怪しうはあらず、又と・・・誰か誘はう
かなどと、不了簡を廻らしながら、何時も乗つて歸
る處は忘れないで、件の三丁目にイみつゝ、時々、
一粒ぐらゐぼつりと落ちるのを、洋傘の用意もない
に、氣にもしないで、来るものは拒まず・・・
去るものは追はずの氣構へ。上野行、浅草行、五六
臺も遣過ごして、硝子戸越しに西洋小間ものを覗く
人を透かしたり、横町へ曲るものを見送つたり、頻
りに謀叛氣を起して居た。

處へ・・・

一目、其の艶なのを見ると、何故か、氣疾に、づ
か／＼と飛着いて、下りる女とは反對の、車掌臺の
方から、・・・早や動出す、鐵の棒をぐいと握
つて、ひらりと乗ると、澄まして入つた。が、何の
ために然うしたか、自分でもよくは分らぬ。

其處に茫乎と立つた状を、女に見られまいと思つ
た見榮か、其とも、其の女を待合はしてゞも居たや

うに四邊あたの人にひと見みらるゝのをはば憚かつたか。・・・
しかし、實じつはどちらでもなかつた、と渠かれは云いふ。

乗合のりあひは随分ずぶん立籠たてこんだが、何處どこかに、空席くうせきは、と
思おもふ目めが、先まづ何なにより前さきに映うつつたのは、まだ前側まへがはか
ら下おりないで、横顔よこがはも襟えりも、すつきりと硝子戸がらすどこし越こに
透すきとほ通とほる、運轉手臺うんてんしゆだいの婀娜あだすがた姿。

誰も知つた通り、此の三丁目、中橋などは、通の
中でも相の宿で、電車の出入りが餘り混雑せぬ。

停まつた時、二人三人は他にも降りたのがあつた
らう。けれども、女に氣を取られて其には些とも氣
がつかぬ。

乗つたのは、何の口からも一帆一人。

入ると最う、直ぐにぐいと出る。

卜前の硝子戸を外から開けて、其の女が、何と！

姿見から影を抜出したやうな風情で、引返して、
車内へ入つて來たらうではないか。

而して、ばつちりした、霏のある、涼しい目を、
心持俯目ながら、大きくニいて、此方に立つた一帆
の顔を、向うから熟と見た。

見た、と思ふと、今立つた舊の席が、其れなり空
いて居たらしい。其處へ入つて、ごた／＼した乗客
の中へ島田か隠れた。

其の女は、丈長掛けて、銀の平打の後ざし、それ
者も生粹と見える服装には似ない、お邸好みの、鬢
水もたら／＼と漆のやうに艶やかな高島田で、強く
其が目に着いたので、くすんだお召縮緬も、何故か
紫の俤立つ。

空いた處が一ツあつたが、女の坐つたのと同側
で、一帆は些と慌しいまで、急いで腰を落としたが。

胸、肩を揃へて、袴と詰込んだ一列の乗客に隠れ
て、内證で前へ乗出しても、最う女の爪先も見えな
かつたが、一目見られた瞳の力は、刻み込まれたか
と鮮麗に胸に描かれて、白木屋の店頭に、つゝじが
急流に燃ゆるやうな友染の長荷祥のかゝつたのも、
其の女が向うへ飛んで、逆に又硝子越しに、扱帯を
解いた亂姿で、此方を差覗いて居るかと思ふ。

行^{ゆき}。
やがて、心着^{こころづ}くと標示^{しるし}は萌黄^{もえぎ}で、此^この電車^{でんしゃ}は浅草^{あさくさ}。

一帆^{かずほ}が其^その住居^{すまひ}へ志^{こころ}すには、上野^{うへの}へ乗^のつて、須田^{すだちや}町^{ちやう}あたりで乗換^{のりか}へなければならなかつたに、つい本^{ほんち}町の角^{かど}をあれなり曲^{まが}つて、浅草橋^{あさくさばし}へ出^でても、まだうか／＼。

最^もも、故^{わざ}とゝはなしに、一帳場^{ちやうばごと}毎^{ごと}に氣^きを注^つけたが、女^{をんな}の下^おりた様子^{やうす}はない。

で、其處^{そこ}まで行^ゆくと、途^と中^{ちゆう}は既橋^{つまやばし}、藏前^{くらまへ}でも、駒^{こま}形^{がた}でも下^おりないで、屹^{きつ}と雷門^{かみなりもん}まで、一^{しよ}緒^{じゆ}に行^ゆくやうに信^{しん}じられた。

何^{なん}だらう、髪^{かみ}のかゝりが藝者^{げいしや}でない。が、爪^{つま}はづれが堅氣^{かたぎ}と見えぬ。――何^{なん}だらう。

「とそんな事^{こと}。……中^{なか}に人^{ひと}の數^{かず}を夾^{はさ}んだばかり、つい同^{おな}じ車^{くるま}が居^ゐるものを、一^{ひととせ}年^{ねん}、半^{はんとし}年^{ねん}、立^{たて}續^{つづ}けに、こんがらかつた苦勞^{くらう}でもした中^{なか}のやうに種^{いろ／＼}々々

な事を恩ふ。又雲が濃く、大空に亂れ流れて、硝子の薄暗く成つて來たのさへ、確とは心着かぬ。

が、藏前を通る、あの名代の大煙突から、黒い山のやうに吹出す煙が、渦巻きかゝつて電車に崩るゝか、と思ふまで凄じく暗く一成つた。

頸許が偶と氣になると、尾を曳いて、ばら／＼と玉が走る。窓の硝子を透して、霰の其の、ひやりと冷たく身に染むのを知つても、雨とは思はぬほど、實際、上の空で居たのであつた。

さあ、浅草へ行くと、雷門が、鳴出したほどな其の騒動。

どさ／＼打まけるやうに雪崩れて總立ちに電車を
出る、乗合のあわたゞしさより、仲見世は、どつと
音のするばかり、一面の薄墨へ、色を飛ばした男女
の姿。

風立つ中を群つて、颯と大幅に境内から、廣小路へ散り懸る。

きちがひ日和びよりの俄雨にはかあめに、風かぜより群集ぐんしふが狂くるふのである。

其その紛まぎれに、女をんなの姿すがたは見みえなく成なつた。

電車でんしゃの内うちはからりとして、水みづに沈しづんだ硝子函がらすばこ、車しゃし掌やうと運轉手うんでんしゆは雨あめに恰あたかも潜水夫せんすゐふの風情ふぜいに見みえて、束つかの間まは塵ちりも留とめず、――外そとの人ひとの混雑こんざつは、鯨しやちに追おはれたやうな中なかに。――

一帆かずほは誰たれよりも後おくれて下おりた。最もう一人ひとりも賤のこらな
いから、女をんなも出でたには違ちがひない。

が、拍子抜けのした事は夥多しい。

ストンと溝へ落ちたやうな心持ちで、電車を下りると、大粒ではないが、引包むやうに細かく降懸る雨を、中折で弾く精もない。

鼠の鍰をぐつたりとしながら、我慢に、吾妻橋の方も、本願寺の方も見返らないで、此處を的に來たやうに、素直に廣小路を切つて、仁王門を眞正面。

濡れても判明と白い、處々むら／＼と斑が立つて、雨の色が、花簪、函迫、輪珠數などが落ちた形に成つて、人出の混雑を思はせる、仲見世の敷石にかゝつて、傍目も觸らないで、御堂の方へ。

其處等の豆屋で、豆をばち／＼と焼く匂が、雨を

蒸して、暖かく顔を包む。

爾時、廣小路で、電車の口から颯と打った網の末
が一度、混雑の波に消えて、やがて、向のかはつた
仲見世へ、手許を細くすら／＼と手繰寄せられた體
に、前刻の女が、肩を落して、雪かと思ふ襟脚細く、
紺蛇目傘を、姿の柳に引掛けて、艶やかにさしながら、
駒下駄を軽く、襦をはらはらと些と急いで來た。
唯見ると、左側から猶豫らはないで、眞中へ衝と
寄つて、一帆に肩を並べたのである。

なよやかな白い手を、半ば露顯に、翻然と友染の
袖を搦めて、紺蛇目傘をさしかけながら、
「貴下、濡れますわ。」

と言ふ、瞳が、動いて莞爾。留南奇の薫が陽炎の
やうな糠雨にしつとり籠つて、傘が透通るか、と近
増りの美しさ。

一帆の濡れた額は快よい汗に成つて、
「否、構はない、私は。」
と言つた、が此は心から素氣のない意味ではなか

つた。

「だつて、召物が。」

「何、外套を着て居ます。」

と別に何の知己でもない女に、言葉を交はすのを、不思議とも思はないで、恚うして二言三言、云ふ中にも、つい、さしかけられたまゝで五歩六歩。花の枝を手に提げて、片袖重いやうな心持で、同じ傘の中を歩いた。

「人が見ます。」

何うして見る處か、人脚の流るゝ中を、美しいしぶきを立てるばかり、仲店前を逆らつて御堂の路へ上るのである。

又、誰が見ないまでも、本堂からは、門をうる抜けの見透一筋、お宮様でないのがまだしも、鏡があると、歴然と最う映らう。

「御迷惑？」

と察したやうに低聲で言つたのが、尚ほ色めいた

が、些と蛇日傘を傾けた。

目隠しなど除れたかと、はつきりした心持で、
迷惑處ぢや……然し穩であります。一人
ものが随分通ります。」

と漸と苦笑した。

「では、別ツこに……。」と云ふなり、拗ね
た風にするりと離れた。

と思ふと、袖を斜めに、一寸隠れた状に、一帆の
方へ蛇目傘ながら細りした背を見せて、其處の繪草
紙屋の店を視めた。けば／＼しく彩つた種々の千代
紙が、染むが如く雨に纏れて、中でも紅が来て、女
の臉をほんのりとさせたのである。

今度は、一帆の方が其の傍へ寄るやうにして、

「何方へ行らつしやる。」

「私？……。」

と傘の柄に、左手を添へた。其が重いものゝやう
に、姿が撓つた。

「何處へでも。」

此^{これ}を聞^き棄^すてに、今^{いま}は、ゆつくりと歩^あ行^るき出^だしたが、
雨^{あめ}がふは／＼と思^{おも}ひのまゝ軽^{かる}い風^{かぜ}に浮^う立^たつ中^{なか}に、何^ど
うやら足^{あし}許^{もと}もふら／＼と成^なる。

四

門の下で、後を振り返つて見た時は、何店へか寄つたか、傍へ外れたか。仲見世の人通りは雨の臙に、ちらはらとより無かつたのに、女の姿は見えなかつた。

其切り逢はぬ、とは心の裏に思はないながら、一帆は急に寂しく成つた。

妙に心も更まつて、少時何事も忘れて、御堂の階段を・・・あの大提灯の下を小さく上つて、嚴かな廂を・・・欄干に添つて、廻廊を左へ、角の擬寶珠で留まつて、何やら吻と一息ついて、零するまでもないが、しつとりとする帽子を脱いで、額を手巾で、ぐい、と拭つた。

「素面だからな。」

と歎息するやうに獨言して、扱いて片頬を撫でた手を其のまゝ、欄干に肱をついて、遍く境内をづらりと視めた。

早いものゝで、最う番傘の懐手、高足駄で悠々と
歩行くのがある。然うかと思ふと、今に成つ
て一目散に驅出すのがある。心は種々な處へ、此か
ら奥は、御堂の背後、世間の裏へ入る場所なれば、
何の卑怯な、相合傘に後れは取らぬ、と肩の聳ゆる
まで一人で氣競ふと、雨も霞んで、ヒヤ／＼と頬に
觸る。一雫も酔覺の水らしく、ぞく／＼と快く胸が
時めく

が、見透しの何處へも、女の姿は近づかぬ。

「馬鹿な、其切か。いや、然うだらう。」
と打棄放す。

大提灯に、はた／＼と翼の音して、雲は暗いが、
紫の棟の蔭、天女も籠る廂から、鳩が二三羽衝と出
て翻々と、早や晴れかゝる銀杏の梢が矢大臣門の屋
根へ飛んだ。

胸を反らして空模様を仰ぐ、豆賣りのお婆の前を、
内端な足取り、裳を細く、蛇目傘を稍前下りに、す
ら／＼と撫肩の細いは……確に。

スーと傘をすぼめて、手洗鉢へ寄つた時は、衣服の色が、美しく湛へた水に映るか、と此の欄干から遙かな心に見て取られた。・・・折から其の道筋には件の女唯一人で。

水色の手巾を、はらりと媚かしく口に銜へた時、肩越に、振仰いで、一寸廻廊の方を見上げた。

のめ／＼と其處に待つて居たのが、了簡の餘り透く気がして、見られた拍子に、ふらりと動いて、背後向きに横へ廻る。

パツパツと田舎の親仁が、掌へ吸殻を轉がして、煙管にズー／＼と脂の音。くゝ、と何處かで鳩の聲。茜の姉も三四人、鬱金の婆様に、菜畠の阿媽も交つて、どれも口を開けて居た。

が、あ、と押魂消て、ばらりと退くと、其處の横手の開戸口から、艶麗なのが、すうと出た。

本堂へ詣つたのが、一廻りして、一帆の前に顯は

れたのである。

すぼめた蛇日傘に手を隠して、

「お待ちなすつて？」

又、ほんのりと花の薫。

「何、些とも。……ゆつくりお参詣をなされば可い。」

「貴下こそ、前へ行らしつてお待ち下されば可うござんすのに、出張りに居らしつて、沫が冷いではありませんか。」

匆匆と先へ行けではない。待つてくれゝば、と云ふ、其の待つのは何處か、約束も何もしないが、最う恚う成つては、度胸が据つて、

「だつて雨を潜つて、一人でぴしよ／＼歩行けますか。」

「でも、其の方がお好きな癖に……」

と云つて、肩で故とらしくない嬌態をしながら、片手で一寸帯を壓へた。ばちん留が少し摺つ

て、……薄いが膨りもある胸を、緋虚子の下緊が、ハツ口から溢れたやうに打合はせの繻子を覗

く。

其その間あひだに、きりゝと挟はさんだ、煙管筒きせるつつ？ ではない。

象牙骨ざうげほねの女扇をんなあふぎを挿さして居ゐる。

今いま壓おさへた手ては、帯おびが弛ゆるんだのではなく、其その扇子あふぎ

を、一息探いきぶかく挿さ込んだらしかつた。

五

紫の矢絰に函迫の銀のぴら／＼と云ふなら知らず、
 闇櫻とか聞く、暗いなかにフト忘れたやうに薄紅の
 ちら／＼する凄いい好みに、其の高島田も似なければ、
 薄い駒下駄に紺蛇目傘も肖はない。が、それは天氣
 模様で、まあ分る。けれども、今時分、扇子は餘り
 お儀式過ぎる。．．．踊の稽古の歸連なら、相
 應したのがあらうものを、初手から素性のをかしい
 のがい此で愈々不思議に成つた。

が、其も其の筈、あとで身上を聞くと、藝人だと
 言ふ。藝人も藝人、娘手品、と云ふのであつた。

思ひ懸けず、餘り變つては居たけれども、當人の
 女の名告るものを、怪しいの、疑はしいの、嘘言だ、
 と云つた處で仕方がない。まさか、とは考へるが、
 さて人の稼業である。此方から推着けに、あれそれ
 とも極められないから、兎に角、不承々々に、然う
 か、と一帆の頷いたのは、しかし觀世音の廻廊の欄
 干に、立竝んだ時ではない。御堂の裏、田圃の大金

の、唯ある數寄屋造りの四疊半に、膳を竝べて差向つた折からで。

最も事の其處へ運んだまでに、聊か氣に成る道行の途中がある。

一帆は既に、御堂の上で、其の女に、大形の紙幣を一枚、紙入から抜取られて居たのであつた。

矢張練磨の手術であらう。

其時、扇子を手で塵へて、
で歩行く方が、

「．．．．お好きな癖に．．．．」

と然う云ふから、一帆は肩を揺つて、

「恚う成つちや最う構やしません。是非相合傘にして頂く。」と威すやうに云つて笑つた。

「まあ、駄々ツ兒のやうだわね。」

と莞爾して、

「貴方、」と少し改まる。

「え。」

「あの、少々お持合はせがござんすか。」
と澄まして言ふ。一帆は聊か覺悟はして居た。

「あゝ。」

と故と鷹揚に、

「幾干ばかり。」

「十枚。」

と胸を素直にした、が、又其の姿も佳かつた。

「一寸、買物がしたいんですから。」

「お持ちなさい。」

此の時、一帆は背後に立つた田舎ものゝ方を振向いた。皆、きよろり／＼と視めた。

女は、帯にも突込まず、一枚掌に入れたまゝ、黙つて、一帆に擦違つて、角の擬寶珠を廻つて、本堂正面の階段の方へ見えなく成る。

大方、仲見世へ引込んだのであらう、買物をする
と云へば。

さて何をするか、手間の取れる事一通りでない。

煙草も最う吸ひ飽きて、拱いてもだらしなく、ぐつたりと解ける腕組みを仕直し仕直し、がつくりと仰向いて、唇をぺろ／＼と舌で嘗める親仁も、踞んだり立つたりして、色氣のない大欠伸を、あゝとする茜の新姐も、満更雨宿りばかりとは見えなかつた。が、綺麗な姉様を待飽倦んださうで、どや／＼と横手の壇を下り懸けて、

「お待遠だんべいや。」

と、親仁が最らしい顔色して、ニヤリともしないで吐くと、女どもは哄と笑つて、跟香の煙の黒い、吹上げの沫の白い、黄昏のやうな中へ、びしょ／＼と入つて行く。

「吃驚して、這奴等、田舎ものゝ風をする掏賊か、ボン引か、と思つた。軽くなつた懐中につけても、當節は油断がならぬ。」

其の時分まで、同じ處に茫乎と立つて待つたのである。

早く下りよ、と段は其處に階を明けて斜めに待つ。
 自分に恥ぢて、最う其の上は待つて居られないまで
 に成つた。

端へ出るのさへ、後を慕つて、紙幣に引摺られる
 やうな負惜みの外聞があるので、角の處へも出ない
 で居た。何故か、がっかりして、氣が抜けて、其の
 横手から下りて、路を廻るのも億劫でならぬので、
 はじめて、ふら／＼と前へ出て、元の本堂前の廻廊
 を廻つて、欄干について、前刻來懸けとは勢が、か
 らりとかはつて、中折の鰐も深く、面を伏せて、其
 處を傳ふ風も、我ながら辿々しかつた。

トあの大提灯を、釣鐘が目前へぶら下つたやうに、
 ぎよつとして、つと正面へ魅まれた顔を上げると、
 右の横手の、廣前の、片隅に綺麗に取つて、時なら
 ぬ竊木が一本、其處へ植わつた風情に、四邊に人も
 なく一人立つて、傘を半開き、眞白な横顔を見せて、
 生際を濃く、美しく目迎へて莞爾した。

「澤山、待たせてさ。」と馴々しく云ふのが、遅く成つた意味には取れず、逆に怨んで聞える。

「言葉戦ひ合ふまじ、と大手を擴げて無手と寄つて、

「何處にしませう。」

「どちらへでも、貴下のお宜しい處が可うござんす。」

「ぢや、行く處へ行らつしやい。」

「何うぞ。」

と最う、相合傘の支度らしい、片袖を胸に當てる、柄よりも姿が細りする。

丈がすらりと高島田で、竝ぶと蛇日傘の下に封。

で、大金へ入つた時は、舟崎は大膽に、自分が傘を持つて居た。

けれども、後で氣が着くと、眞打の女太夫に、恭しくもさしかけた長柄の形で、舟崎の圖は宜しくない。

通とほされたのが小座敷こざしきで、前刻まづき言いつた其その四疊半よふはん。
廊下らうかを横よこへ通口かよくちが一寸ちよつと隠かくれて、氣きの着つかぬ處ところに一室いちま
ある……

數寄すきに出來できて、天井てんじやうは低ひくかつた。疊たゝみの青あきさ。床柱とこばしら
にも名ながあらう……。壁かべに掛かけた籠かごに豌豆あま豆のふ
つくりと咲さいた眞白まっしろな花はな、蔓つるを短みじかく活いけたのが、
窓明まどあかりに明あかるく灯ひを點ともしたやうに見みえて、桃ももの花はなより
一層そうほんのりと部屋へやも暖あたかい。

用ようを聞きいて、圓鬚まげに結ゆつた女中ぢよちゆうが、しとやかに扉ひら
を閉しめて去いつたあとで、舟崎ふなざきは途中とちゆうも汗あせばんで來きた
のが、又また恚いかう籠こもつたので、火鉢ひばちを前まへに控ひかへながら、
羽織はおりを脱ぬいだ。

其それを取とつて、すらりと扱しこいて、綺麗きれいに疊たゝむ。

「此これは憚はゞかり、否いゝえ、其それには。」

「まあ、好すきにおさせなさいまし。」

と壁かべの隅すみへ、自分じぶんの傍わきへ、小膝こひざを浮うかして、さら
りと遣やつて、片手かたてで手巾ハンケチを捌さばきながら、

「眞個ほんとうに些ちと暖あたか過ぎますわね。」

「私は、逆上るから尚ほ堪りません。」

「陽氣の所爲ですね。」

「否、お前さんの爲さ。」

「そんな事をおつしやると、最つと傍へ。」

と火鉢をぐい、と壓して来て、

「其のかはり働いて、些と開けて差上げませう。」

「と弱々と斜にひねつた、着流しの帯のお太鼓の

結目より低い處に、丁ど、背後の壁を仕切つて、細

い潜り窓の障子がある。

カタリ、と引くと、直ぐに圍ひの庭で、敷松葉を

拂つたあとらしい、露の葉が芽んだやうに、飛石が

五六枚。

柳の枝折戸、四ツ目垣。

其の垣根へ乗越して、今フト差覗いた女の鼻筋の
通つた横顔を斜違ひに、月影に映す梅の楚の如く、
大なる船の舳がぬつと見える。

「まあ、可いこと！」

と嬉しさうに、何故か仇氣ない笑顔に成つた。

「池があるんだわね。」
 と手を支いて、壁に着いたなりで細りした頤を横
 にするまで下から覗いた、が、其處からは窮屈で水
 は見え、忽然として舳ばかり顯はれたのが、寧そ
 風情であつた。

カラノゝと座下駄が響く、と此處よりは一段高い、
 上の石疊みの土間を、約束の出であらう、裾模様の
 後姿で、すらりとした藝者が通つた。

向うの座敷に、わやノゝと人聲あり。
 枝折戸の外を、柳の下を、がさノゝと箒を當てる、
 印半纏の圓い背が、踞まつて、はじめから見えて居
 た。

其には差構ひなく覗いた女が、藝者の姿に、密と、
 直ぐに障子を閉めた。

「向直つた顔が、斜めに白い、其の豌豆の花に面
 した時、眉を開いて、熟と視た。が、瞳を返して、

右手に高い肱掛窓の、障子の閉つたまゝなのを屹と見遣つた。

咄嗟の間の艶麗な顔の働きは、たとへば口紅を衝と白粉に流して稻妻を描いた如く、媚かしく且つ鋭いもので、敵あり迫らば翡翠に化して、窓から飛んで抜けさうに見えたのである。

一帆は思はず坐り直した。
處へ、女中が膳を運んだ。

「おーッ。」

「天氣は？」

「可鹽梅に霽りました。……些と、お熟過

ぎはいたしませんか。」

「否、結構。」

「もし、貴女。」

女が、もの馴れた状で猪口を受けたのは驚かなかつたが、一ツ受けると、

「何うぞ、置いて去らしつて可うござんす。」と女中を起たせたのは意外である。

「帆は頃刻して陶然とした。」

「更めて、一杯、お知己に差上げませう。」

「極が悪うござんすね。」

「何の。然うしたお前さんか。」

と膝をぐつたり、と頭を振つて、

「失禮ですが、お住所は？」

「は、提灯よ。」

と目許の微笑。丁と、手にした猪口を落すやうに

置くと、手巾ではつと口を押へて、自分でも可笑か

つたか、くす／＼笑ふ。

「町名、町名、結構。」

「否、提灯なの。」

「へい・提灯町。」

と、けろりと馬鹿氣た目とろで居る。

又笑つて、

「然うぢやありません。私の家は提灯なんです。」

「何處の？ 提灯？」

「観音様の階段の上の、あの、大な提灯の中が私

の家です。」

「えゝ。」と云つたが、大概察した、此の上尋ねるのは無益である。

「お名は。」

「私？ 名ですか。娘」

「娘子さん。――成程違ひない、で、お年紀

は？」

「年は、婆さん。」

「年は婆さん、お名は娘、住居は提灯の中でおゐでなさる。……はてな、いや、分りまし

た……が、お商賣は。」

と訊いた。

――後に舟崎が語つて言ふやう――

如何に、大の男が手玉に取られたのが口惜いと言つて、親、兄、姉をこそ問はずもあれ、妙齡の娘に向つて、お商賣？ は些と思切つた。

しかし、さもしいやうではあるが、其には廻廊の紙幣がある。

其の時、些と更まるやうにして答へたのが、
「私は、手品をいたします。」
「近頃はたゞ活動寫眞で、小屋でも寄席でも一向入りのない處から、座敷を勤めさして頂く。」

「一寸嬰兒さんにお成り遊ばせ。」

思懸けない、其の御禮までに、一つ手前藝を御覽に入れる。

「お笑ひ遊ばしちや、厭ですよ。」
と云ふ。

「此は拝見！」と大袈裟に開き直つて、其の實は嘘だ、と思つた。

すると、軽く膝ひざ支いて、蒲團をずらして、すらりと向うへ、・・・・・・扉の前。――此方に劣らず杯は重ねたのにい衣の薰も冷りとした。
扇子を抜いて、疊に支いて、頭を下げたがいがつくり、と低頭れたやうに悄れて見えた。

「世渡りの爲とは申しながら・・・・・・前へ御祝

儀を頂いたり、

と口籠つて、

「お恥かしく存じます。」と何と思つたか、ほろりとした。其の美しさは身に染みて、いまだ夢にも忘れぬ。

いや、其處どころか。

あの、籠の白い花を忘れまい。

すつと抜くと、掌に捧げて出て、其のまゝ、連子窓の障子を開けた。開ける、と中庭一面の池で、又思懸けず、船が一艘、隅田に浮いた鯨の如く、他の中を切割つて浮く。

空は晴れて、霞が渡つて、黄金のやうな半輪の月が、薄づと、淡い紫の羅の樹立の影を、星を鏤めた大松明の如く、電燈とともに水に投げて、風の餘波は敷妙の銀の波。

ト瞻めながら、

「は、」と聲が懸る、袖を絞つて、袂を肩へ、脇

あけしろ 明白き花 一片、手につたか、と思ふと、非ず、緑の
つる 蔓に葉を開いて、はらりと船へ投げたのである。

たゞ 唯一攫みなりけるが、船の中に落つると齊しく、
つぶてう 礫打つた水の輪のやうに舞つて、花は、鶴の羽の如
へき 舳にまで咲きこぼれる。

そのとき 爾時きりゝと、銀の無地の扇子を開いて、かざし
そで て 袖の手のしなひに、ひら／＼と池を招く、と澄透
みづ みづ 水に映つて、ちら／＼と揺めいたが、波を浮いた
かすみ かすみ 霞を落ちたか、其の大きさ、やがて扇ばかりな眞
しろ 白な一羽の胡蝶、ふは／＼と船の上に顯はれて、つ
はな はな 離れず、豌豆の花に舞ふ。

やがて 臆て蝶が番に成つた。
うち 内は寂然とした。

げいしや 藝者の姿は枝折戸を伸上つた。池を取廻はした廊
か 下には、欄干越に、燈籠の数ほど、づらりと竝ぶ、
ぢやぢや 女中の半身。

蝶は三ツに成つた。影を沈めて六ツの花、巴に亂れ、卍ど飛交ふ。

時にそよがした扇子を留めて、池を背後に肱掛窓に、疲れたやうに腰を懸ける、と同じ處に、肱をついて、呆氣に取られた一帆と、フト顔を合せて、恥ぢたる色して、扇子を其のまゝ、横に背いて、胸越しに半面を蔽うて差俯向く時、すらりと投げた裳を引いて、足袋の爪先を柔かに、こぼれた褌を寄せたのである。

フト現から覺めた時、女の姿は早やなかつた。

女中に聞くと、

「お車で、唯た今

【完】